

# 岡山「古代吉備の謎を探って」

日本先史古代研究会 会員 吉備 槌太郎  
(本松 一郎)

古代吉備国の歴史はほとんどが謎だが、私が最近謎解きに挑んでいる幾つかの事柄の中から御紹介します。

- ① 七十五頭家の謎を探る。 ② 古代吉備国の中心地を探る。 ③ 古代吉備国の範囲を探る。  
④ 赤石の謎を探る。 ⑤ 久米と槌系の武術 ⑥ 吉備槌系と伝承

今回は以上の項目で古代吉備の謎解きに挑み少しでも早く古代吉備の謎が解明される一助になれば幸いです。  
と思っています。

## 1. 七十五頭家の謎を探る。

七十五が付く言葉で比較的有名なのが、全国各地で古代から寺社で実施されている七十五膳祭で新嘗祭の一種とされる。七十五膳祭で有名なのは吉備津神社で、藤井宮司さんにお聞きしたが、幾つかの説が在るが、数が多い意味と解釈をされ七十五膳祭は継続されている。全国には膳の数の違う祭りも存在し、例えば日光東照宮の二荒山神社の三品立七十五膳には位の低い神様の為に十六膳が脇に用意され、脇祭りとされるらしいから本来は七十五膳祭と推理される。私は「七十五」は、元々は吉備を治めた頭家の数であり、我家の土(槌)系調査をしているが、先祖と一族の神々は全国各地の寺社に多く祀られており、関係が在る筈であり、本来は「七十五頭家」が元と確信している。さらに、七十五頭家の内訳配分もほぼ判明したので御紹介する。

- ① 槌(土)系と物部系の三十三頭家、② 賀茂系と大国系の三十三頭家、③ 残り九頭家の内訳は不明。

九頭家は、住吉系、素戔系、葛城系か？ 現在九頭家は調査中です。

古代吉備の頭家の謎、頭家数の配分は美作の金刀比羅山を元とする本山寺御住職の道教思想の示唆でほぼ解けた。

槌系と物部系の三十三頭家は708年前の1302年(正安四年)志呂宮御祭頭文次第の資料を元に、美作宮座資料をまとめられた寺坂氏の資料からもほぼ判明しており、我家と同じ頭家筆頭の助貞家と、物部系に近い多くの一族は720年程前に古代の丹国(丹波国、丹後国、但馬国)辺りに移住した伝承がある。

## 2. 古代吉備国の中心地を探る。

私の住む神乃邊は吉備でも古い土地柄で、神域でもあり、特殊性も多く謎であった。話は吉備の中心と関係が無いようであるが、陰陽五行説から見れば、槌(土)系の古代に於ける位置付けが判る。平成21年版の「むすび」(神社本庁と神宮司庁編集)の特集は、我家と一頭の属する「土」であった。この機会に土(槌)を再調査すると、陰陽五行説では「中央」である。古代吉備の中心地は土(槌)の本拠地である神乃邊神目であろうと推理している。

### 〔1〕現在も残る神域の範囲

神乃邊の現在は半径が2~3キロメートル程であるが、古代吉備国では少なくとも三つの範囲に分けられる(現在の神乃邊を加えれば四つの範囲となる)。吉備全域が神域の可能性もある。

### 〔2〕神乃邊の範囲を探る



石上布都魂神社 拝殿



山上の旧社地の本宮

県内に該当する範囲も神域で神乃邊であった筈である。詳細は以下に述べるが、神乃邊は神部と同じと思われ、有名な奈良石上神宮の元宮でもある石上布都魂神社(写真は拝殿と山上の旧社地の本宮)は神部と記

述され、現神乃邊の東南(辰巳)に位置し、中心部から数キロの距離である。次に記述する安仁神社が一宮になる以前は当神社が一宮であったとの話もある。神乃邊の最中心部は半径十キロメートル程在ったと推理できる。神乃邊の最中心部周辺に関しての知識をお持ちの方は少ないと思われるので、先に比較的有名な神社等が登場する二つ目の領域を述べる。

### ① 二つ目の領域の範囲

吉備の中山は、備前国と備中国の国境があり、同じ山に今は両国の吉備津彦神社と吉備津神社の二つの一宮が中山を挟んで鎮座している。そのうちの吉備津神社は北を向き、古くから種々の憶測がなされたが、吉備中心部を向いたとの説は見えない。主な理由は吉備中山周辺や総社南部が吉備の中心地とされている為である。私は、元々は津山の中山と岡山の中山は対で、神域の守神として設置されたと推理している。為に神乃邊神目より等距離で、津山中山神社は南を向き、岡山中山の吉備津神社は北を向き、共に中央を向く設計である。この説を補強する為に記述すれば、備前の元一宮の安仁神社も北西を向き、神域の最中心部南の山空(津山線の建部駅と金川駅の間、箕地トンネル上部)方面を向き謎とされている。南東(辰巳)方向には日本のピラミッドと騒がれた熊山遺跡の東に在る熊山の烏帽子磐が該当する。中心部より反対方向で北西(戌亥)の等距離には県内で有名な木山神社が在り、美作最南部の福渡に在る素盞鳴尊の烏帽子磐を結べば線上にも上山が在る。

### ② 神乃邊の最中心部を探る

紙面の関係で簡潔に述べれば、神乃邊の最中心部の北には分水嶺の筒の宮山(左には山王の森)があり、筒は槌や雷(いかづち)と同じで、言い換えれば、槌の宮山、雷の宮山とも言える。南には山空があり、南の麓には三社もの真名井神社が並び、さしずめ高天原かも知れない。東には金勢様を祀る龍天山があり、西には南や南東から眺めると富士山のように美しい姿の本宮山があり、山の神峠の上に位置する御所からの眺めは格別である。北北西には吉備の二上山あり大和の二上山より柔らかな曲線の山である。



吉備の二上山



筒の宮山



吉備の本宮山

北西(戌亥は富徳で尊い方位)に役行者が吉備で大和の葛城山に模して、修研道の拠点づくりを図ったと思われる高蒼山が在り、中心部より反対の東南方向(辰巳は繁榮の方位)で距離は異なり、先に述べた石上地区が在る。この北西と東南の線は古来から、重要な意味を持っている。なお最中心部の南西方向の端は、県下最大級の祭りとも言われる加茂大祭の加茂総社宮が存在する。鴨系と大国主系の居住地は昔の旭川の流れに沿った西側(東は槌と物部系)で田地子の大穴周辺には現在も大国系の筆頭である大頭氏が居住される。

大国主神の本名は大穴牟遲命(おおなむじ)で居住伝承地は牧場の為に削られていたが、今は綺麗に緑化をされた筈である。なお、福渡の烏帽子磐の旭川西の対岸は建部(大和武尊の御名代)だが、真西に素盞鳴尊が住んだ伝承も残る高祖山(神力山)が存在しているが、江戸期に北向き「神の棚」が崩れて、多くの鉄剣等が出土したらしいが、保管された筈の出土品は蔵の中には何も残っていなかった。しかし、古老の話から、山頂付近に歩くと響き「どん」と呼ぶ所があり、大きな古墳が在ると推理される。

## 3. 古代吉備国の範囲を探る。

三つ目の範囲は吉備国の東西南北の国境(くにざかい)には守神が祀られていた筈である。(神域である神乃邊の中心部には東西南北の姓を持つ家が置かれていた。)北の守神は出雲の神在月が終わる神送り時には、前半が出雲大社で行われ、後半は佐太神社で行われる。この神送り神事の場所が標高も地名も吉備の神目と同一の神目山の中腹で、窪地の池へ船を浮かべて行われると、朝山宮司さんから聞いている。さらに、「なめそ」(海蛇)伝説も同じだが、吉備神乃邊の伝承は「おおなめそ」で大人の太もも程度と伝わる。南は、四国山脈の剣山であるが、詳細調査は今後の課題である。西は伊予大三島の大山祇神社も等距離に配置され、大三島の元宮は島の東側に存在し、東を向いていた。しかし、場所を西に遷し、向きも変え現在は伊予の一宮である。

地元の伝承を元に記すならば、現在の元宮がある北側の小高い丘の上に存在したとされる。私は昔の神社は高い山上で北東を向いていたと推理する。西が判明したからには東の賽の神が問題で、神戸市須磨公園より東の古社を探したが、条件の合う神社が発見出来ず困っていた時に、偶然にも赤石資料に兵庫歴史研究会の梅村前会長の記述された資料があり、早速お会いした時に概略の話から菟原住吉ではと教えられ、資料も頂戴した。調べると古代に神戸市兵庫区の和田岬には日本書紀の巻第二十五に記述される「赤石の櫛淵」の沼名棕が存在し、「播磨、摂津両国の境」と記述される。梅村氏は赤石櫛淵を研究され、古代の櫛淵を明治二十四年の地図上に復元描写されて、「赤石の櫛淵は兵庫にあった」にまとめられている。

結論を言えば、赤石の櫛淵の東には塩土山が北東に長く横たわり、櫛淵の奥に「菟原住吉」が記載され、当然に対岸は吉備国から明石国へさらに播磨国になった地区の筈である。菟原住吉が流失する前は西を向いたと推理する。なお、菟原住吉の在ったと推理される辺りへ梅村氏に案内を頂いたが、私が推理した線と三キロ半程度しか違っていなかった。菟原住吉の流失や難波の港が砂で埋まり使用不能となり、摂津東端に難波の港や菟原住吉に該当する神社として住吉大社を建立したと推理する。松の化身とも伝わる住吉大社も吉備神乃邊、中心部の志呂神社神饒と同じ「ふと」「まがり」の神饒が存在し、神社の向きも西向きでした。

古代吉備の範囲を整理すれば、古代吉備の中心部から等距離に吉備を守る賽の神を設置し、東は、今は無い摂津の菟原住吉。北は出雲の佐太神社。西は伊予大三島の大山祇神社。西は四国山脈の剣山だが未調査である。

#### 4. 赤石の謎を探る。

昔に我家の屋敷が在った松尾川の中州には赤い大きな磐座が存在し、十数年位前までは、赤石様と呼ぶ大きな磐座が存在したが、河川改修時に盗まれている。盗人どもに天罰、神罰を祈るばかりである。真西の荒神様御神体も同じ赤石がお祀りして在ります。当地は神域であり古代吉備の中心地の筈で、神乃邊の最中心部でもあり、不思議に思っていました。

赤石を調査した結果、全国に赤石は祀られている。私が確認した場所としては、兵庫県明石(赤石)、三重県熊野であるが、その他にも、北は東北の岩手県柴波(柴波は石の色で赤石神社も存在)から、南は高千穂の赤石神社まで各地に赤石神社が存在する。神社以外に石棺や石室にも赤石が使用され、さらに古墳の謎を解く鍵とも言われる楯築遺跡や吉備の中山頂上部の磐座からも水銀朱(朱は硫化水銀で高貴な色)が塗られた磐座が幾つか確認されている。さらに秋田県の男鹿半島には赤神社が存在し、越(こし)国の能登半島にも古くは吉備や出雲と同じ標高に神目地区があり、神目神社は場所を遷し現在も存在し、西の海沿いには赤神の地名も在る。これらは関連があると推理するが、奈良の茶臼山古墳の赤い石棺の公開時にベテランの博物館員の方に尋ねると、古墳との関連は否定されたが、熊本県宇土市の赤石が石棺に使用されたのは公知だが、当地には赤石神社が存在するから、とても無縁と思えない。なお赤石が明石になったが、大化改新以前は、明石郡、美囊郡、加古郡、印南郡 の四郡が明石国とされる。

#### 5. 久米と槌系の武術

古代の槌系には多くの武人が登場する。槌系と物部系は共に古代に軍事と祭祀を司どり、槌系一族及び七十五頭家と支族は多くの日本人に崇拝され現在も各地に祀られる。槌系と物部系の武人には火之迦具槌神、武甕槌神、武葉槌(倭文)神、武経津主神、大山祇大神、祇園様(素盞鳴尊)、猿田彦大神、饒速日尊、武御名方富尊、武克槌尊、武治速見命、武狭別命、等が居る。武士の時代となり武術の必要性増大から「槌系が古代から育んだ武術」が、新しい武術の流派として各地で花開いた。後の明治 38 年(1905)にも嘉納治五郎氏外 22 名中に、8 名の竹内流関係者が参加して、「日本武徳会柔道乱取制定委員会」が開催され「柔道」も誕生した。



竹内道場の愛宕神様



「ふと」= 女陰 「まがり」= 男根

槌系の武術は、「久米と猿田彦尊の武術」「槌と物部の武術」とも言われる。源平時代に敵味方を問わず両軍将兵に幾度となく賞賛された「平家侍大将平影清の武術」も槌系愛宕神化身を通じて清和源氏竹内家に伝授されたが、宗家も相伝家にも認識は無かった。愛宕神の化身が介在しており当然かも……。なお影清様は我家の分水嶺の山で、古代祭祀の無形文化財、男性と女性の性器を模した「ふと」「まがり」の神饌を捧げる神事発祥の場所と推理される影清山に祀られる。それも七十五頭家の物部系に近い清和源氏光延氏一頭に祀られている。村上源氏ならまだしも、何故に壇ノ浦後も庇護し、現在まで祀るのかは不明である。但し、新潟の大悲山景清寺の御住職から送付を頂いた資料には、源氏に生まれ、母方の平氏への養子(説)が記されていた。古代～近世武術の流れで、西日本で竹内流誕生の頃に、槌の東の拠点である常総の「香取神宮や鹿島神宮」は武道場と化し、長威斎は香取神宮の神威を感じて「天真正伝香取神道流」を応仁の乱(1399)の頃に開眼し、後の武術に影響を与えた。具体的に「鹿島新当流」「鹿島神流」「鹿島神道流」「鹿島新陰流」等が誕生して、槌系武神の「布都御魂神」は武経津主神と武甕槌神らしく、靈力を受た神聖な剣技で剣霊に留まらず「雷神」で火の靈力を持つ「火乃神」「水軍の守護神」である。これは瀬戸内海の「山の神」「海の神」「酒の神」「武の神」種々の神で、吉備神乃邊の西の守神で御先祖の大三島「大山祇神社の大山祇大神」とも酷似する。なお剣聖の宮本武蔵は兵庫県生まれ説が有力で印南郡米田村説、揖東郡宮本説があり、岡山県大原育ちらしいが、没年から逆算し、天正十二年(1584)生まれらしい。父の無二斎と竹内流の道場訪問が竹内流年表に在り、支流大原畝流も在った。六十数度試合をして一度も負けず熊本県雲巖寺の靈巖洞で五輪書、独行道を書き終え六十二歳で往生したが、吉備の備前などでは「作州へ行って棒を振るな」と言われる程に「久米と猿田彦の武術」、「槌と物部の武術」以来の環境で育った成果であるかも知れない。

## 6. 吉備槌系と伝承

元々我家(元松家＝本松家)の先祖は、古代より明治までは通字(とうしじ)として代々男性は「槌」を、女性は「茅」を付けていました。男性は江戸の文政年間の生まれで明治末期に八十一歳で没した槌太郎で通字は終わりましたが、私のペンネームに頂戴しました。古くは日本書記の神代上の天地開闢には、国常立尊と国狭槌尊の御先祖様が登場し、有名人では愛宕神＝火之迦具槌神＝火産靈(ほむすび)。古事記に火之夜芸速男神、火之炫毘古神(ひのかがびこ神)、とある。八世紀の創作神話では火之神迦具槌神が生まれ伊邪那美尊が死ぬと伊邪那岐尊は嘆き悲しみ迦具槌神の首を十握剣で切り、血が岩にほとばしり「岩石の神」「火の神」「雷神」「雨の神」「水の神」多くの「山神」が生まれ、この時に八神が生まれ、死んでも山の八神が生まれている。

女性には「茅」が付けられ、有名人では、大山祇大神妃＝野槌神＝鹿屋(茅)野比売神、等が存在し、私の母親も古来からの茅を付けています。現在の岡山県吉備中央町(元は賀陽町と加茂川町)の賀陽は迦夜＝賀夜とも言われ、先の吉備津神社は「かや氏」建立と伝わるが、我家には「かや氏に関しては全く伝承は無い」しかし、「かや」には「女性の地」の意味があると伝わり、四～六世紀の朝鮮半島南部には、倭人が建国と韓国でも言われる「伽耶(国)」は「任那、加羅」とも言われ、六世紀中頃に滅ぶが、吉備の迦夜も朝鮮半島の伽耶にも女王が居ても不思議ではないと思っている。

数年前に東京から「古代の槌(土)が現在に生き残ったと話題になっているよ」と知らされた。槌(土)系の元松(本松)家は日本最古の一族との説も在るが、七世紀末から八世紀初頭に日本の歴史が消されたとする説が多いが、我家と一族の歴史も殆んど不明である。槌系にとって「草の茅も木の栢も稲も神聖」であり、関連のある多くの寺社では、「御田植え祭り」や、「栢の木が植えられ」、夏祭り等には「茅の輪くぐり」が行われている。これは茅の輪を女性に見立てた子孫の繁栄と五穀豊穡を祈願する為の祭りと思われる。

### 追 補

#### 土宮の簡易解説

伊勢神宮外宮は豊受大神を祀り、愛宕神の孫と言われ、外宮の真向かいに存在する。土宮3座として大歳神(初代大王の饒速日尊)、宇迦御魂(稻荷大明神、倉稻魂尊)土御祖神(埴安媛尊)を祀る。全ての別宮が南面するが土宮のみ東面(冬至の日出方位)する。説明書は1. 宮名:土宮(つちのみや) 御祭神:大土乃御祖神(おおつちのみおやのかみ)2. 御鎮座地:豊受大神宮の大前御池真向い深い杉木立の中に土宮が鎮座される。